「野分き立つ」

川崎照代 作

登場人物

内藤宗一	（七十六歳）	築40年の家屋に、現在、佐和子・綾子と三人で生活
佐和子	（四十五歳）	融の妻　現在管理栄養士
邦彦	（二十二歳）	長男　北海道大学生
綾子	（二十歳）	長女　短大生
山村健二郎	（五十八歳）	鈴子の夫　海外出張多く、ロンドンより帰国　定年間近
鈴子	（五十歳）	宗一の長女　健二郎の妻　内藤家相続人
大月タカ	（六十九歳）	宗一の妹
野本	（三十歳）	内藤融（とおる）　十六年前三十才過ぎ妻　大光建設設計部勤務

時　一九九四年秋

所　東京――古くからの住宅街の一角にある、内藤宗一の家

舞台　築四十年以上の木造家屋。
和室を板張りに替え、二間をぶち抜いて使っているが、天井や壁、欄間などそのままで、ちぐはぐな感じ。
上手奥に玄関。正面はガラスの引き戸。その奥に廊下を挟んで客間、宗一の居室。
下手寄りのガラス戸はテレビ、サイドボード、電話台などで引き戸の一枚を残して塞がれている。
上手手前にドア。その先に綾子の部屋と廊下の突き当たりに便所。奥寄りに二階への階段口。
上手側に古びたソファ、椅子、テーブル。下手側にダイニングテーブルと椅子。
下手手前から台所に通じる。
全場を通じて変わらない。

二

同じ日の午後。
欄間は元通りに納まっており、宗一が雑巾がけしている。
時々ヒューと突風。それにともなってカサカサッと家のきしむ音。

佐和子　一昨年の屋根の修理が八十万。去年の外壁の塗り替えに六十万。このまま住むとなったら今年の暮は畳替えしなきゃでしょ。一畳一万五千円ですって。奥の客間が八畳、おとうさんの部屋が六畳。二階が六畳と四畳半。（電卓を手に取って）全部で二十四畳半……エーッ。三十六万七千五百円――聞いてるの？

宗一　玄関はじゃあ直さないのか。

佐和子　みっともないでしょ片側板打ちつけたままじゃ。不用心だし。一番安いのでも十五万だって。

宗一　出すよ十五万。

佐和子　そんなこと言ってないでしょ！

宗一　再婚するんじゃないのか。

佐和子　再婚？　――あたしが？　ねえ、ぼけてないわよね。この家を建て替えようって話してるのよ。なのにどうして再婚よ。

宗一　そうか――ならいい。

佐和子　なにがいいのよ。

宗一　ん？

佐和子　……。何考えてるのよ。

宗一　ん？　だから……再婚するのかなって――ホラ、さっきタカが……。

佐和子　……再婚させたいの？

宗一　そりゃ――うむ。あんたがそうするというのならわたしは……。

佐和子　……。ウッフッフッ。馬鹿みたい。有りもしない話に真剣な顔しちゃって。

宗一　そうか！　違うのか。アッハッハッハ。

佐和子　真面目な話よ。真剣よあたし。

宗一　有りもしないって――。

佐和子　建て替えの方！

宗一　ああ……。

佐和子　この三、四年急激に修理増えてきてるのよ。馬鹿馬鹿しいとは思わない？　あっち直してこっち直してお金チビチビつぎ込んで。つくづく無駄な気がしてきたの。もう限界だって追いつかないって高橋工務店の社長も――。

宗一　高橋の先代が当時最高の材木使って腕によりかけて建てた家だ。バラックばかりで腕がムズムズしてた好きに建てさせてくれって。結構な代金払ったんだ。

佐和子　その材木が白蟻にやられているのよ。床下覗いてこりゃひどいって。そうだわ六月の白蟻駆除の十八万もあったんだ。

宗一雑巾を持って出ていこうとする。

佐和子　おとうさん！　ここ坐って。

宗一　うむ。（佐和子の斜向かいに坐る。）

佐和子　北海道で頻繁に地震あるでしょ。関東も危ないんじゃないかって。大正十二年の大地震から七十年。そろそろきてもおかしくないんだって。白蟻喰ってるから危ないって高橋さん。そうでなくても築四十年以上じゃひとたまりもないって。根太（ねだ）が折れて潰れてペシャンコの圧死。そんな死に方したくないでしょ。

宗一　あたしいや！

宗一　先代が自信をもって建てた家がペシャンコになるなんて高橋もよく平気で言えたもんだ。

佐和子　おとうさん！

宗一　五年はもつと言った。

佐和子　もってあと五年と言ったの！

宗一　この家で死にたい。

佐和子　五年のうちに死ねるの？

宗一　……。

佐和子　……。おとうさんは五年もてばオンの字かもしれないけど、あたしはこれから先まだ長いのよ。潰れることわかってる家の中で指くわえて待ってる訳にはいかないの四十五なのまだ。

宗一　歳の順に死ぬとは決まってない。

佐和子　う――。

宗一　……金がないんだ。

佐和子　あたしが用意するのっ。

宗一　持ってるのか金！

佐和子　借りるのよ公庫と銀行から。

宗一　佐和子がか。

佐和子　おとうさんには貸してくれないでしょもう。収入、年金だけなんだから。

宗一　うむ。

佐和子　今なら借金しても何とか返していけるのよ。邦彦も綾子も来年卒業でしょ。学費いらなくなるし。それに今金利が最低でしょ。借り易いの今。借りる年齢ってものがあるの。返すあてがあって初めて出来る借金なんだから。

宗一　邦彦就職決まったのか。

佐和子　話そらさないで。

宗一　これ以上負担はかけられん。

佐和子　負担て？

宗一　借金背負うのは佐和子だ。

佐和子　住む家がなくちゃ生きてけないわ。わかってはいるんでしょ。このままでは住

めないって。

宗一　うむ。

佐和子　もしかしてあたし名義の家になるのが気に入らないのかしら。

宗一　そんなんじゃない。

佐和子　じゃ何が嫌なわけ？

宗一　嫌ってんじゃない。

佐和子　じゃいいのね。

宗一、佐和子の髪に手をのばす。

佐和子　なに！

宗一　え？　埃だよ。ホラ。

佐和子　……。愛着あるのわかるわ。柱一本釘一本、おとうさんの気持がこもってるのよね。でもね、もう無理なの追っつかないの。気持切り替えてよ。快適な家にするから。水回り一カ所にまとめて掃除が楽になるようにするし。台所の設備も今流行りにするわ。オーブンに電子レンジ。

宗　一　わたしの元気をあてにしての建て替えなら乗れん。

佐和子　そうじゃなくて――……。フー。チャンスなんだけどなあ。……喜んでくれると思ったのに。

宗　一　そうじゃないんだわたしは佐和子に借金背負わせるのが――。

佐和子　他に誰が居て？

宗　一　うむ……。もう動いてるのか。高橋に建てさせるのか。

佐和子　おとうさんの了解無しに動けるわけないでしょ。そりゃ、いろいろ調べてはいるけど。あたしの年収で公庫からいくら借りられるかとか、建築費坪いくらくらいとか。おとうさんやっぱり高橋工務店でなくちゃまずいわよね。

宗　一　知らん！

佐和子　なによ！　借金背負わせられないって泣けちゃうようなこと言っときながら――やっぱり反対なんじゃない！

宗　一　そんなんじゃない！

佐和子　そんなじゃなくて何なのよ！　さっきからそればっかり。はっきり言ってよイエスかノーか。でなきゃ動けない。

宗　一　……。金を出すのはあんたなんだ。わたしに何が言える。（立って奥へ向かう）

佐和子　おとうさん……。

鈴子の声　（玄関のガラッと開く音と同時に）どうしちゃったのおこの玄関。

佐和子　……おねえさん？　（立つ）

鈴　子　（入ってきて）なあにどうしたの。ああこっちもなんだかひどいわねえ。

健二郎　（のっそり入ってきて）やあ、御無沙汰。

鈴　子　ずいぶんうらぶれちゃったわねえ。ここまでボロ家になってるとは思わなかったわあ。

健二郎　いいじゃないのこの古色蒼然たるたたずまい。日本に帰ったんだってやっと実感できるよ。いいねえ木造家屋は。うむ。この開放感がたまらんねえ。暑けりゃ窓を開け放ち、寒くなったら炬燵に足突っ込んでうたた寝。自然と共存。完全空調システムで勝手に窓も開けられんコンクリートのマンションなんぞくそっくらえだ。僕はこのままで構わないよ。ま、玄関はいただけないがね。

鈴　子　寒がりで暑がりのあなたがこのまま住めっこないでしょ。隙間だらけで夏は熱風冬には寒風で冷暖房ガンガンかけたって追いつかないんだから。

健二郎　古いものを何でも壊してしまうのは日本人の悪いところだ。

鈴　子　アラ！　言うことが違うじゃない。言い出したのは誰なのよ。

健二郎　おとうさんお元気でしたか。

宗　一　いつ帰ってきたんだ。

鈴　子　言わなかった？　ひと月前よ。もうもう大変！　五年振りでしょ。あっちこっち挨拶にかけずり回って一日が二十四時間じゃ足りないくらい。

宗　一　こないだの電話は日本からだったのか。

鈴　子　区別つかなくなっちゃったわねえ。ちょっと前までは国際電話には交換手が間に入ってたけど今は殆ど直通だから。いつからかしら。

健二郎　えーと、どなた？

佐和子　……佐和子です。

健二郎　そう佐和子さんだ。日本茶のうーんと濃いのをいただけませんかな。

佐和子　ごめんなさいすぐ仕度します。（慌てて台所へ去る）

健二郎　いやあ、やっと腰を落ちつけられますよ日本に。長かった。

鈴　子　ひどいもんよ商社って。子供がいないことをいいことに次から次に海外勤務な

んだから。

健二郎　日本に帰るなり今度は何処に何時行くのって。海外希望したのは君の方だ。

鈴　子　またすぐ行かされるなら荷ほどきしないで済むでしょ。梱包代馬鹿にならないのよ。あなたはね、その図体を右から左に動かせば済むけどこっちは簡単にはいかないのよ。転勤知らされて長くて二週間。酷いときはたったの五日よ。ひとりで何もかもやらされてごらんなさいよ。何処でもいいからひとつ所に行きっぱなしの方がましよ。

健二郎　五年間動かなかったろ。

鈴　子　ニューヨークならねえ。そりゃ悪くはなかったわよロンドンも。でもねえ、太陽が足りないわ。サマセットモームのホラあの小説、何てったっけ？　くる病の主人公が出てくる。暮すとわかるのよあのどんよりさ。

健二郎　よく言うよ。毎晩芝居観られてロンドン最高って叫んだの他の女だったっけ？

鈴　子　気持奮い立たせなきゃやってけなかったの！

佐和子　（入ってきて）お茶受けおかきしかなくて。

健二郎　結構結構。おかきに番茶。これぞまさしく日本人のティでね。鈴子は日本茶が

嫌いだって出してくれないんだから。

鈴　子　だから海外勤務の夫と暮せたのよ。

健二郎　ここ畳じゃなかったっけ。

佐和子　おかあさんが亡くなったあとに板張りに。

鈴　子　残念でした。あなた好みの茶の間でなくて。

健二郎　寝ころんでテレビ観ながらうたた寝って、いいんだけどなあ。

鈴　子　畳はお茶室だけよ。あなたそこに寝たら？

健二郎　ハッ。日本茶嫌いなやつが茶室造ってどうするのかね。

鈴　子　お手前なら出来ますよ。外国のお客様喜ぶんだからなくちゃ困るの。

健二郎　客を招ぶ気はないんだけどね僕。僕はね、ステテコ一枚で一日中暮せる日を夢見てこれまで頑張ってきたの！

鈴　子　冗談言わないでよ。あたしはね、招んだり招ばれたり、団らんの絶えない暮しを夢見てるの！　あなたのステテコ姿を見つづけるつもりはないわ。それなら家なんかいらない。

佐和子　あら！　お家つくられるんですか。

鈴　子　再来年定年なのよ。社宅にあと二年はいられるけど、どうせなら早い方がね。

宗　一　マンションはどうした。

鈴　子　ないわ。

宗　一　ない？

鈴　子　ロンドン行く直前。あそこ場所がよかったから高く売れたの。よかったわいい時手放して。バブルの絶頂だったから。

宗　一　その、売った金で建てるのか。

鈴　子　足りないかもね。税金結構もってかれちゃったし。退職金できるだけ手をつけたくないんだけど。

健二郎　ここ何坪あるの？　百坪ある？

佐和子　……八十坪です。

健二郎　八十かあ。

鈴　子　贅沢言えないでしょ。何てったって都内なんだから。

佐和子　あの――……。

鈴　子　なあに？

綾子の声　（玄関をあけながら）おじいちゃんまたやっちゃったのねえっ。ア！

綾子そっと入ってくる。

綾　子　ただいま。お客さま？

佐和子　御挨拶なさい。鈴子おばさんと健二郎おじさんよ。綾子です。

健二郎　ホウ。おばあちゃんのお葬式の時は生まれてなかった？

綾　子　死んだの父の方が先ですから生まれてなければあたしは誰の子なんですか。

健二郎　アハハ！　そうか融君の方が先だったか。そういえば葬式に融君はいなかったなあ。で？　君は誰の子？

鈴　子　何馬鹿なこと言うの！

健二郎　失敬。

鈴　子　大学生？

綾　子　短大二年です。

鈴　子　短大なの！　今からの女性は四年制出てなくちゃ。縁談も大卒が望まれるのよ。

綾　子　伯母さんもあたしのこと記憶にないですか。あたしは覚えてます。しっかり！

言われたんですおばあちゃんのお葬式の日。融ったら二人も子供つくっちゃってたの。馬鹿ねって。

佐和子　綾子！

綾　子　心に決めたんですそのとき。早く一人前になろうって。親の義務は二十歳まででしょ。だから短大。縁談の為に行く大学じゃないですから。

健二郎　アッハッハッハ。鈴子やられたなあ。いやあ、賢い賢い。しっかりしたもんだ。

鈴　子　やあねえ、そんなこと言ったあたし？　いやだわ。覚えてないこと言われたって、困っちゃうわよねえ。

綾　子　おじいちゃんお弁当どうした？

宗　一　あのまんまだ。

綾　子　よかった。お昼食べそびれたの。――失礼します。（馬鹿丁寧に礼をして台所へ去る）

宗　一　直夕飯だよ。

佐和子　お夕飯召し上がってらっしゃいますでしょ。おとうさんお寿司でも取りましょうか。

健二郎　寿司！　結構ですなあ。

鈴　子　そうね。今夜は外で済ますつもりだから招ばれようかしら。

宗　一　もう決まったのか。家だ。

鈴　子　それできたのよ。佐和子さん融の友だちにいないかしら。安く設計してくれるひと。

佐和子　……亡くなって十五年になりますからつき合いはもう。年賀状くださる同期の方がひとり。

鈴　子　聞いてみてくれない？　急ぎたいの。

宗　一　土地はもう決まってるのか。

佐和子　どの辺りでしょう。場所を言っといた方が。

鈴　子　どの辺りって、ここだけど。

佐和子　……は？

鈴　子　……。

佐和子　……おねえさんがここに……。

宗　一　――建ってる家があるんだ！

鈴　子　もちろん壊さなきゃ。

宗　一　壊すだと！　住んでるんだぞわたしらは。

鈴　子　大丈夫よちゃんとお父さんの部屋用意するから。

宗　一　そんなことじゃない！

健二郎　なんだ話ついてたんじゃなかったのか。

鈴　子　話つけるってあなた――……。承知してくれると思ったから。

宗　一　承知なんぞしておらん！

鈴　子　承知して今。迷惑かける話じゃないのよ。建築費は一切こっちで持つの。ボロ家がピカピカの新築になるの。悪い話じゃない筈よ。

綾　子　（弁当を持ったまま入ってきて）この家建て替えて誰と誰が住むってんですか！　おじいちゃんの部屋は造る？　――じゃあたしたちはどうなるんですか。お母さんとお兄ちゃんとあたしは何処へ行けってのの！

佐和子　綾子！　ちゃんと食べてしまいなさい。

綾　子　伯母さんづらしないでよ。たったひとりの弟のお父さんのお葬式にも来なかったくせに。

鈴子　あのね、日本にいなかったの。

綾子　おばあちゃんの時も海外！　しかもうーんと遠いカイロからっ。――着物取りにきたじゃない。タカバッバが言ったわ。形見を一枚貰おうと思ってたのに鈴ちゃんたらみいんな持ってっちゃったって。

鈴子　みんな鈴子にやるから一切この家には残さないでねって。粗末に扱われたくないからって。

綾子　お母さんがおばあちゃんのものを粗末に扱うってんですか！

鈴子　知らないわよわからないわよあたしこの家に暮してないんだから。

綾子　言っときますけどね、嫁いびりはあったけど姑いびりはなかったんですっ。

鈴子　あなたううんと子供だったでしょ。

綾子　一度も見舞いに来たことない大人より一緒に暮す子供の方がよっぽど見るもの見てますっ。今度はこの家ごとぶんどりに来たんでしょ。わかってんだからあ。

鈴子　あたしには権利あるの。

綾子　権利には義務がつくってことも知らないんですか。卑怯よ今までおじいちゃんほっといて全部お母さんに押しつけといて今になって権利権利って。

佐和子　いいかげんにしなさい。あなたが口出しすることじゃないのっ。

綾子　お母さんが言えないから言ってやってるのよ。

健二郎　僕こういうの苦手なのよ。話ついてるっていうから同居もま、いいかって。

鈴子　そんな言い方ないでしょ！　元はといえばあなたが――。

健二郎　おいおい僕は義理なんだからね。権利ないんだから。ねえ佐和子さん。僕にも佐和子さんにも権利はないんだ。

佐和子　――……。よかったですわこの家放っといて。放っとくしかなかったですけど。

綾子　放ってなかったわ。何百万も使ってきてるわこの家には。住んでるからよ。住んでるのよあたしたち。住んでる者に権利あるの知らないんですか――居住権！

鈴子　あたしはなにもそんなこと――。ねえだったら一緒に住める家を建てれば――そうよ三階建てにして。ねえあなた。

健二郎　うむ。そりゃ、まあ、いいけど。

佐和子　建たないです三階建て。建てられません。この辺は第一種住居専用地域なんです。建ぺい率五十パーセント。容積率百パーセント。高さ制限もありますし、厳

しいです。

鈴　子　あらそうなの建たないの三階建て。あなた建たないって。

健二郎　佐和子さん土地のことに詳しいなあ。それとも何？　調べた？

佐和子　……税金払ってますから。

鈴　子　あら、そんなことまで税金に関係あるの？

綾　子　税金なんかどうでもいいわよ！　何言ってんのよお母さんたら――あたしたち路頭に迷うことになりかねないのよ！　言うこと言わなきゃあ。

宗　一　アーーッ！

みんなギョッとして宗一を見る。

鈴　子　いやだわいきなり大声出して。びっくりするでしょ。

宗　一　（肩を大きくふるわせて）ここはわたしの家だ。わたしの物だ。どいつもこいつもよってたかって……よってたかって……。（フーと気が抜けたようにくず折れる）

佐和子　おとうさん！

パーッと駆け寄って宗一を支える。

鈴　子　（健二郎にしがみついて）嫌！　あたし嫌！　ひとの死ぬの見るの恐いのよ。

佐和子　死ぬ筈ないでしょ！　こんなことで死なれてたまるもんですか。何の看病もしないで死なれるの融さんひとりでもうたくさん！　――綾子！　冷たいタオル！

綾子慌てて下手へ走る。

鈴　子　……。

健二郎　……。